

民間放送スタート！ 以来あれこれ

—とんでもない話 いい話—

元朝日放送プロデューサー

旅行ペンクラブ会員 小 山 美智子

1. はじめに

まず私の経歴を申し上げたい。一番初めは、ラジオ神戸と言っていた、いまのラジオ関西で初代アナウンサー。そこで2年ほど在籍し、それから朝日放送にうつり、プロデューサー。そこでは、定年をのばしてまで働くこととなった。やっと縁が切れたのは86年であった。それからは自分の好きなことをやろうと思ひ嬉しかった。

私は先週、一週間ほどの間に、驚いたり、喜んだりで大変であった。みなさんも喜ばれたと思うのだが、それはオリンピックの話題である。私はそれほどまでスポーツを一所懸命、見るほどではないのだけれど、それでも小塚選手に会って手を握りたいと思うくらいである。

もう一つ大変だったことは、シャーリー・テンプルという映画女優が亡くなったと聞いたことである。全新聞にも載ることがなかったが、大変有名な女優さんであった。私は幼少期、父が厳格な人であったため、映画といえばディズニーのアニメかシャーリー・テンプルの映画しか見せてもらえなかった。そのため、私が6歳から8歳のころに彼女の作品をいくつか見た。最近、日本でも古い映画が復元されて、たくさん放送されているが、彼女の作品がなぜ放送されないのかと不思議である。フィルムは20世紀フォックスが持っていたのだが、日本だけ、出されていないようである。シャーリー・テンプルはアメリカでは外交官のようだとされるほど、外交にも力を注いだ大変な人物であった。シネマの本などをご覧になった際は、ぜひ探していただきたい人である。

公共放送のNHKしかラジオ放送がなかった時代から、アメリカの指示もあったのであろうか、1951年には民間放送が始まることとなった。民間放送は、まず東京と大阪から始まった。大阪では、現在の毎日放送が新日本放送として、朝日放送は朝日放送として、それから1年遅れでラジオ関西が、ラジオ神戸としてスタートする。もちろんテレビはまだ放送されていない時代のことである。こののち、白黒テレビ放送が始まり、カラー放送へと移行してゆく。映像の世界に次第にかわってゆく過渡期であった。

私がなぜこのような仕事を選んだのかをお話したい。戦後は停電も多く、夜は暗かったし、ラジオはNHKしかなく寂しいものであった。聞くのは歌の何とか、のような番組だけである。そのような時、何かの拍子にラジオ神戸が職員を募集しているということを知っ

た。当時はお米をはじめ、食べ物には本当に何もなかった。戦後は戦中よりもひどいくらいで、配給も少なかったのである。なんとなくつまらない、そんな気分を少しでも変えたいと試験を受けてみようと思ったのである。

募集はラジオで聞いたのか、新聞で見たのであったか定かではないが、丁度ひっこしの前日ですぐに申し込みとのことで、あわてて履歴書用紙を買ってきて、引っ越しの荷物の上で書いたことを覚えている。いまはなくなってしまった神戸の商工会議所で、試験を3日間通って受けた。面接で、何になりたいかと聞かれ、アナウンサーではなく制作の仕事がしたいと言ったのだが、もう定員がないと言われた。しかし、なぜアナウンサーでは駄目なのかと問われ、素直に「アナウンサーは喉を気づかわなくてはならないし、生活も規則正しくしなくてはならない、それに私は美人でもないから」と答えたのであった。帰って父にそのことを話すと、試験を受けに行ったらは嫌だこれは嫌だ、はないだろうと叱られた。なんでもよいから入れればよかったのだと言われたのだったが、次の日行ってみるとなんと合格していた。私を含めた女3人、男9人のアナウンサーが採用された。

2. ラジオ神戸時代

今は神戸駅前のビルに入っているが、それ以前はどんなところにあったか、みなさんご存知だろうか。須磨の海水浴場を少し入ったところにある平屋の建物であった。JRの須磨の駅から神戸の市電に乗り、少し戻ったあたりの衣掛町という停留所の近くである。神戸の社屋に変わるまでは、そこをビルに建て替えて使っていた。私はその時にはすでに退社して、朝日放送に移っていた。朝日放送でジャズポピュラーの専門の人がアメリカに行くことになり困っていたところ、ラジオ神戸を聞いていたら私が喋っていたので、聞いてみたらどうかとなったそうである。私は父の教えもありクラシックを聞くことが多く、ジャズは全く知らなかった。けれども、末広光夫さんにいろいろ教えてもらい、次第に好きになった。クラシックは藤田光彦さんという方に習った。彼は大阪の藤田美術館の親戚の方で大変なお金持ちであった。ピアノを教えたりもしているが、クラシックの評論がご専門である。非常に変わった方でお宅に伺うと「電気代を払わなかったから、電気を止められている。暗いだろう」とおっしゃられたこともあった。さらには、蛾をつかまえて食べるということでも有名であったから、「先生は本当に召し上がるのか」と尋ねると、「食べるよ」と言って捕まえて食べてみせた。私は見たので知っているが、ほかの人は伝説だと言って信じていないようである。

ラジオ神戸はそのような、変な、面白い人が集まっていた。「ジャズ・クラシック乗合船」という番組を、藤田さんと末広さん、私で番組をやらせてもらったが、手紙も割と多く届き、人気のある番組だった。その頃、アメリカから帰ったばかりの高橋という人から、「電話のリクエスト」というのを、面白いからやってみないかと言われた。今でこそ何でもない事だが電話をもらってすぐレコードを出すのは大変だとも思ったが、テストでやってみ

ることになった。するとどんどん電話が鳴るのである。

当時、まだレコードがたくさんはなかったので、進駐軍にまで借りに行ったこともあった。大きなベロベロとしたサイズのものから、ドーナツ盤という小さなものまでであった。電話リクエストの反響は大きく、クリスマスに夜通し放送でやってみたならば、それがずっと続くことになった。電話リクエストを始めたのは日本で私が初めてであった。

番組で喋るのは本当に大変なことばかりであった。音楽はガラスの向こうのミキサーがレコードをかけ、そのリクエストのカードを私が読むのだが、「～さんのリクエストの曲です」と言っても曲がかからない。どうしたのかというと、レコードの準備が間に合っていないのである。私は「急いでください」とそのまま言ったものだから、それが放送されてしまった。のちの会議でそのようなことがないように、と厳しく言われたが、今となってはラジオでもテレビでも「あ、忘れた、それとって！」なんて放送されることもしょっちゅうであろう。当時はとても堅い雰囲気、みんな NHK のようにやらなければならないという時代であった。

私が感心したのは、ラジオ神戸は 1952 年の 4 月、他局と半年以上遅れての開局であったから、その間、研修させてもらえたことである。内田英一という NHK にいた人が、先生になって、アナウンサーを教育してくれた。それが大変すばらしいもので、「新聞を読んで話し言葉になおしてみなさい」とか、「NHK の真似をしたら民間放送の意味がない、好きなことをやるほうがいい」と言った。あのころにすれば、非常に開けた方であった。そして「体のこともあるが、アナウンサーとして何より一番大事なことは、電車に乗ったら絶対に座るな、外を見ろ」というのである。アナウンサーというのは、手紙を読んだり、記事を読んだりしなければならない。すると必ず地名が出てくる。それを間違えるのは絶対にいけない。駅で止まったならば、そこが何という駅なのか見る、それくらいの気持ちで臨まなくてはならないということである。確かに見ていると、駅の名前も難しいものがある。今のアナウンサーさんにはお名前など、必ずふりがなを付けてくださいという人もいるが、住所も読めないひとがたくさんいる。赤穂の日生（ひなせ）、その近くの坂越（さこし）など、バスから見えていないと覚えられないようなものがたくさんある。今の大河ドラマ「軍師官兵衛」でも出てくる御着（ごちゃく）というのも難しいし、東京の人は十三（じゅうそう）も読めない。そうして徹底して教育されたことは本当に良かったと思う。

ある日、電車が遅れて、どうも間に合いそうにない。私は「ただいま 10 時になりました。大丸が開店いたします。」というアナウンスをしなければならなかった。そのあとでニュースが始まるのだが、それを言わなければ絶対にいけない。私は市電を降りるなり、靴を持ってはだしで走った。スタジオへ行き、その時はどうにか間に合ったのだったが、その後ろ姿を、役員が見ていたのである。靴を持って走って行ったのは誰だと言われたが、そんな失敗談はいくらでもある。まじめな生活はしないけれども、自分で自由に生活できていたように思う。

3. 朝日放送へ移る

録音機は今では小さくなったが、私が入社したときはとても大きなものであった。テープを入れてまわすのだが、ラジオ神戸では技術の人がたくさんいないので、私も担いで出かけた。重いのを持ち帰って聞いてみると、なんと音声が入っていないと言われたこともあった。一年ほどすると、もうすこし小型のデンスケというものになったが、それも自分で持っていき、採って帰って整理し、技術さんに返すというような流れであった。朝日放送へ移ると、当時はインタビューに行きましようとなれば、荷物は技術さんが持ってくれて、ディレクターやらみんな運転手つきの車に乗って、4、5人で向かう。前は一人でインタビューしていたので、なんて楽な仕事があるのかと驚いた。しかし、一人で機械も何もかもやったので、できることや学ぶことがたくさんあった。今から考えるとありがたいことであったと思う。

朝日放送へ行って良かったこともある、お金があることだ。大きなスタジオでフルオーケストラの音楽をやったり、ミュージカルをやったりもした。斉藤トオルという、ピアノや作曲も優秀な人で、この人と一緒にミュージカルをつくろうと夜から朝まで作業した日のことである。仕事が終わって、斉藤さんが帰られたあと、片づけをしていた。その日に放送するものだったため、出来上がった曲をミキサーの人と聞いていると、どうも途中がおかしい。音楽が何小節か飛んでしまっている。楽譜が落ちていないかと探したが見つからなかったため、ミキサーの人がテープを繋いで直してくれた。

今では編集は簡単になったが、その頃は切って繋いで、大変な作業であった。あの時、そんなトラブルがあってもできたのは、ミキサーの人の技術がすごいものであったからであろう。考えてみるとアナウンサーは教えればできるが、ミキサーは音楽のセンスが必要である。本当にすごい技術であると思う。

みなさんはテープの編集なんておやりになったことはないだろうか。時折、新しい朝日放送へ行くことがあるが、みんな本当に今は楽だね、とこぼすほど簡単になっているのである。編集といえば、公衆電話みたいなボックスに入って、一日中こもって作業していた。1時間の講演を録音して30分にするため、咳払いひとつまで切って落としたりもしたが、考えてみればそうした無駄なことも大事なことだと思ふ。

4. 小松左京さん・山本直純さん

番組のことをお話ししたい。ホームソング「青い地球の歌」というのは、2年ほど前に亡くなった小松左京さんと山本直純さんが作ったホームソングである。ABC ホームソングは他の局やレコードにないものをやろうということで、昭和29年から始まり47年間、ずっと続いていたが、「青い地球の歌」は東京まで録音しに行ったのだが、録音の最後がどうしてもうまくいかない。山本さんが、最後の歌詞が音にあわないから直そうと言われたが、作詞者

の小松さんに了解を得ずにはできない。しかし、その月に出さなければならない曲である。たしかに歌詞を少し変えれば上手く収まりそうな様子であったので、山本さんに従った。

長い間、小松さん一人のジョッキーをお願いしていた。彼は変わった人で、番組の打ち合わせや下準備などはせず、あっさり「今日は何をしよう」と言うのであった。しかし、それはラジオにとって、とても大切な感覚である。その日になにをするか、というのはテレビにはできないことであろう。小松さんとは、そんな関係で番組をやらせてもらっていた。

「青い地球の歌」の歌詞を渡して、彼はそのままヨーロッパへ行ってしまっていたから、連絡も、相談のしようもなかった。仕方なく、あとから謝ろうと歌詞を変えて録音した。山本さんも普通の指揮者ではないので、うまく作ることができた。できあがったものを小松さんに聞いてもらったところ、よくできたと言われ、ほっとした。本当はやってはいけないことだったので、安堵したのを覚えている。ホームソングは1か月間、ずっと流すのであるが、聞くたびにそのことを思い出すのであった。

小松さんとのエピソードはまだある。今日は名神高速ができたので、その話題はどうかと聞くと、それはいいと言われ、話し始めた。すると「そのうち車は行き先だけ登録して、勝手に連れて行ってくれるようになる」と言うのである。今でこそ、そのようなシステムは実際に考えられているが、その当時からすれば1歩も2歩も、いや4、5歩も先を考えている人であった。そういう意味で、新しい人であった。

5. 土井勝さん・石井好子さん

タレントさんで楽しかったのは、料理研究家の土井勝さんである。土井さんはテレビに出て有名になられたが、その前は私のラジオに出演していただいていた。この方は聞いている人が堅苦しくなく、「私も作ってみよう」と思わせるような話し方で、分量の伝え方など、とても上手だった。ぜひこれは続けたいと、そのころは担当が言えば続けられたので、土井さんとは何年もやらせてもらった。ある日、夜遅くに電話がかかってきて、「明日の準備はできているか」とおっしゃる。私はすっかり忘れていて、「今からでもできますか」と尋ねると、「魚は逃げないし、肉も野菜もあるだろう、何とかなる」とだけ言って切ってしまった。先生が声をかければ、周りの人が何とかやってくれるのだろうが、私が忘れて失敗したことを、自分でどれだけ補うことができるかをみるために、わざと手助けしなかったのである。私は夜9時ごろに魚屋や八百屋をまわって、必死に材料を集めた。このことは今でも夢に見るほどの思い出である。

そのようなことをあえてやらせるというのが、土井さんの偉いところである。忘れていたならば「しょうがない、私がやっておこう」とおっしゃることもできたであろう。私が、こんなことではいけないと覚えさせるためであった。翌日、先生は番組に出てこられても、そのことは一言もお怒りにならなかった。先生は本当に大きな人であると思ったものである。

のちに勝さんが亡くなられて、奥様の信子さんと話をしていた時のことである。勝先生

は打ち合わせでお料理の話しか話さない人だったが、「奥様が最近外でも活躍されているのですね」と話すと、「彼女には親の世話や家のことばかりをやらせてもらっていた、これからは外で仕事があれば少しは自由にやらしてもらいたい」とおっしゃった。このことを奥様に伝えると、「私はそんな優しい言葉を本人から聞いたことがない、彼は家でも威張ってばかりだった、初めて聞いた」と言われた。土井先生は私を通して、奥様に伝えたかったのだと思う。

ほかに、タレントさんはいろんな人がいた。淡谷のり子と言う人をご存知だろうか。名前は聞いたことがあるだろうか。彼女は戦前から歌を歌っていて、戦時中は満州などいろいろなところへ慰問に行ったのであった。その時、綺麗な衣装でステージに上がると軍部からクレームがついた。しかし、「私は歌手です、みなさんは歌を聞いて楽しみたいからいらっしゃるのでしょうか。戦争へ行く人をおくるのであるから、私は一番綺麗な衣装を着ます。絶対にモンペをはいて歌いません」と言い切って、最後まではかなかったという。本当に素晴らしい精神をお持ちだと思った。朝日放送に出られるようになってからも、よく付き合っていたが「女はいつまでもおしゃれで、きれいでいなくてはだめよ」と言われた。その時に彼女は、もう70代だったと思うのだが「わたしはこの年でも、お化粧は1時間かけます」と言われた。80代になって、歩くもの大変になってこられた時、杖をつけてステージに上がって、ピアノの横で歌われる。「先生、ハイヒールだけは危ないのでおやめになってください」と言うと、「いえ、私はみなさんのために歌うのですから、ハイヒールはやめません。どんなに大変でも履きます」とおっしゃった。今の人に、これだけの心構えがあるだろうか。この頃の歌手の人は、出たり、いなくなったりで、一向に名前も覚えられない。

次に石井好子さん。彼女のシャンソンの会は、神戸は大倉山の文化ホール、大阪は毎日会館で行われた。楽屋でお客さんがあまり多くない、パリでは成功したのになぜだろうと話していた。私は「シャンソンというのは詩でしょう、詩の内容がわからなければ楽しくないのではないか」、「ワンコーラスはフランス語で2コーラス目を日本語でわかるように歌ってはどうか」と言った。最初、彼女はシャンソンを日本語でなんて、と渋っていたのだが結局そうだった。ジャズなら英語がわからなくとも、なんとなく聞けるが、シャンソンは心や思いを伝えるものだから、日本語で歌うのがよいと言ったのである。しかし、流れの美しさを言えばすべて日本語にするのはよくない。彼女は亡くなる3、4年前「私、うまくなったでしょう。意味を感じられる歌い方になったでしょう」と言っていた。

ラジオは思ったことが言えるから、ラジオをずっとやっていきたいと思った。最近のお昼のテレビ番組では、「そうだね、あはは」と内輪で笑ったり、もっとひどいものになると笑い声をたしたりしている。それ程までする必要はあるだろうか、そんなことをしてはかえってつまらない。私はラジオの深夜放送を聞くのが好きである。深夜だと話がじっくり聞いて面白いのだ。私は今、好きなことをやれるから、夜中の1時から5時くらいまで聞いて、朝ご飯を食べて30分ほど昼寝するようなことをしている。

また、仕事がなくなって一番良かったことは、旅の研究・お能を見ることができることである。学生時代、京都府立大学にいたので、能につれていってもらったりしていた。お能は本当に面白いと思う。ただ、やっぱり、じっくりと落ち着いて見なければならない。横の歌い手、つまりはコーラスがいて、お囃子がいてというのは、オペラと遜色がない。面をちょっと傾げるだけで、まるで表情の変わるところなど興味深いことがたくさんある。まだ見ず嫌いの方は、ぜひ一度いらしていただきたいと思う。いつのことか、電車の中で、能の本を読んでいたら、隣にきたお婆さんが「自分で謡をするほどではないのですが、お能が好きなんです」と言われた。「偶然、「松風」をみて、こんな面白いものはないと羽衣もみました」とおっしゃった。なんでも本を見て、覚えればよいというものはない。体にしみこんでいくようなことが、本当の好きなことなのだと思った。自分が好きだと思えば、それを離さないで、なさることが良いのだと思う。

6. 放送は聞く人のためのもの

放送をやっていて大変なことはたくさんあった。ストライキがあったときは、朝日放送の建物に入れないのである。しかし、自分の番組は可愛いから、隠れて端から上がって、お弁当は窓から吊り上げて食べたりもした。考えてみれば、そのダメだと言っている人も自分の会社の放送を止めたりはしたくなかった。人間はそういうもので、組織の側として割り切ってやっても、ちゃんと考えがあって目こぼししてくれたのである。その時、愛社精神とはこういうものか、と思った。自分自身のためだけではなく、放送は聞く人のためのものでもある、そう思ったのではないかと思う。

そして、仕事をするうえで大切だと思ったのは、なぜこうなるのか、という好奇心をもつことである。この頃は、手作りの仕事のことを職人芸と言ってとりあげるが、それだけがすごいのではない。お米を研ぐようなことでもちゃんとやれば、おいしいご飯が炊けるのと同じように、自分の手ずからのものをやるということ。好奇心を忘れずもってすれば90でも100でも150までもできる。私の知っている先生は108歳で山田耕作さんの愛弟子であったが、いまだに「そこの歌い方のアクセントが悪い」などとおっしゃる。どこまでも自分で良いと思うことを続けることが大切である。

私が、管先生のところへお勉強に行こうと思ったことを話したい。先生は難しいことをおっしゃらないで、きちっと、わかることを教えてください。他所のカルチャーセンターにも行ったことがあるが、ご自分がよくわかっていないのに、教えておられたりするのはいくらよみとれる。ともかく管先生の講義はどこに飛んでいくのか判らない。持って居られるものが多すぎてところ構わず出てくるのが魅力である。

(2014年2月18日、生活美学研究所本年度関西文化研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学文学部教授 管 宗 次

